

東京成徳大学 八千代キャンパス 図書館だより

Vol. 39
2017. 12. 01 発行

図書館運営委員会

本の歴史

本と言えば「紙に印刷されたもの」と考えますが、紙や印刷技術が発明される以前から「本」は実在したようです。今回は、紙が普及する以前の歴史をご紹介します。

● メソポタミアの粘土板文書

メソポタミアでは最古の書物である粘土板が発見されています。メソポタミアを流れるチグリス川とユーフラテス川の下流は粘土質であったため、その土を厚く板状にし、尖った棒や葦の茎で文字を刻み、日干しにするか、窯を使い600°C前後で焼いて粘土板文書を作りました。

この粘土板はシュメール人によって発明された楔形文字で彫られています。



粘土板文書



パピルス文書



パピルス

● 古代エジプトのパピルス文書

古代エジプトではナイル川湖畔に自生する水草パピルスという植物の茎の繊維からできたもので、エジプトがパピルス紙の生産を独占していました。エジプトのほか、西アジアや地中海沿岸各地に輸出され、かなり高価なものでした。葦で作ったペンと、煤にアラビアゴムなどを加えて作ったインクで文字を書き写しました。



羊皮紙本

● 小アジア・ヨーロッパの羊皮紙本

獣皮を書写の材料とすることは古くからありましたが、これが本格的に本の資材になったのは、紀元前2世紀ごろです。エジプトがパピルスの輸出を禁止したため、羊やヤギの皮を利用し、使いやすい羊皮紙を開発しました。羊皮紙は薄く、両面に書くことができ、耐久性があり折ったり縫ったりできたため、パピルスのような「巻く本」から「綴る本」へと変化しました。これ以後、1500年以上にわたり、羊皮紙が使用されることになりました。その後東洋の製紙方法が伝わり普及するにつれて、衰退しました。



簡牘

● 古代中国の簡牘

中国で紙が普及する以前に用いられた書写材料で、竹の札を竹簡、木の札を木簡といい、両方を合わせて簡牘と呼びます。1枚には1行40字2行80字程度の文字が収まり、長文になると簾のように並べ、麻や革の紐で繋ぎ合せ、これを「冊」と呼びました。こうした書物は腐敗や劣化が少なく、墨の文字もかすれにくいので、長く利用されていました。

(参考図書：世界大百科事典【031/Se22】)



竹簡

木簡

次号へ続く……！

学生による！

Book review

2008年のM-1グランプリ。その日から人生が大きく変わったお笑い芸人がいた。相方は体格が良く、七三分けのテクノカットにピンクのベスト。ブレイク直後のオードリー若林は、見た目の面ではインパクトの強い相方の陰に隠れがちであった。この本は、オードリーの苦労談、というわけではない。相方の登場回数も少ない。社会の常識やしきたりに反感を持ちながら今までの人生を過ごしてきた「若林正恭」という人間が書かれているのだ。彼はしばしば、世間から「人見知り」「ネガティブ」だと思われる。その指摘の答えが、実体験を交えながら返されている。元々は雑誌の連載だったものを単行本化したのがこの本である。そのため本人も文中に書いているが、連載当初と年月の経った後とは考えが変わるといったことが起こってくる。今までできなかったことができるようになっていく。それは、「人見知り」な彼が社会に適応してきていることの象徴ではないか。



『完全版 社会人大学
人見知り学部卒業見込』
著者 若林正恭
発行社 KADOKAWA
2015年12月25日発行
【請求番号：779.14/W14】
図書館3階伝統ゼミ選書

図書館に目当ての本が置いていない！
ということはありませんか？

みなさんからの購入リクエストを受付けています！
たくさんのリクエスト、待ってまーす☆

